編集委員座談会

『現代の理論』のめざすもの

世界史の現況と根源的な歴史認識
新しい「文明」モデルの創出へ向けて
戦後日本の思想と運動をどう総括するか

沖浦和光（桃山学院大学名誉教授・比較文化論）
橋川健史（神奈川大学教授・日本政治思想史）
住沢博紀（日本女子大学教授・現代政治論）
小寺山康雄（市民の会間「アクト」編集長・社会主義論）
司会・宮崎 敏（法政大学非常勤講師・社会経済学）
誌上参加・池田祥子（千葉明徳短期大学教授・家族文化論）

宮崎● 一昨年の一月、一九六〇～七〇年代を中心とする学生運動、労働運動の仲間や研究者達が集まって、ひとつの記念イベントがありました。その時に、いまの政治状況や思想状況下、何か問題提起をできないか、何かメッセージを送せないかという話が出て、『現代の理論』を再発行しようということになりました。二年間、いろいろと議論を重ねて、いよいよ準備号を出すという運びに至りました。

いま出すについては、三つほど難問があります。一つは、出版や雑誌発行の条件が厳しい。そして、理論や思想の多様化と混迷、難しい理屈は受け入れないという雰囲気もある。さらに『現代の理論』の遺産や伝統をどう活かしていくか。そんな難しい条件を克服して出していかなくてはならない。

まず、いまの言論や思想の状況をどう把握、診断するかから。

理論を現実と結び合わせる

橋川● 『現代の理論』の再発刊は仲間内から出てきた話だが、二つほど非常に強く感じたことがあります。

一つは、七〇年代、ある時期には仲間として、ある時期にはかなり厳しい分裂を経て、方々に散っていった。そのかつての仲間が二〇年以上経過して、さまざまな経験を積んできた。その経験してきた場所というのが、比較的、生活の現場に近いところだった。手探りでやってきた状態だったわけだけれど、その経験をなんとかつなぎあわせて、一つの力にできないかということを強く感じたことが、一つです。

では、どういうつなげ方ができるのか。これはいまの思想状況の問題とからみます。なにか一つの理論体系を打ち出して、その体系を共有することで軸を作ることができるだろうか、そんなやり方でいいだろうか。理論は天から降ってくるものじゃない。体験を経験化し、つなぎあわせて、新しい視点が現実とのつながりのなかから生まれてこなくてはならないと感じたのです。現実との関係でいうと、柔軟な結びあわせ方を模索することが必要な状況ではないかと考えました。

かつてわれわれが歴史や社会を認識するとき、なんといってもマルクス主義という理論体系を軸にしてきた。しかし、そのマルクス主義が、そして、それに依拠したと称していた人たちが現実につくりあげた国家や社会経済システムが、現実には崩壊している。少なくともマルクス主義が一つの理論の軸になっていた時代は終わってしまった。その意味では、マルクス主義に代わって、それに匹敵する理論体系をいきなり作り出すというような状況にはないということを共通の認識として出発しなければならないかと。

理論的に考える態度・精神の衰弱を克服する

橋川● もう一つは、もっと基礎的なレベルの話です。理論的に物事を考えるという態度、あるいは精神、雰囲気が希薄になっているのです。いまの時代をどう認識するかという問題と関係する。「戦後」をどう考えるかという議論の中に、歴史は物語でいいんだといういい方がある。少なくとも科学的に歴史を分析して、歴史の中から未来を見通すような問題の立て方が非常に希薄になっていて、むしろ現在の国民、あるいは国家・民族を心理的に安定させるための物語を紡ぎだしていく、それが歴史家の役割だというような議論が平気でされるようになっている。

ともかく理論的な捉え方をしようという意識全体が衰弱している。その状況に対しては、一つの理論体系を提供する以前に、まず、理論的に物事を考えるとはどういうことかを明らかにすることから出発せざるをえない。そこに今の思想状況の一番困難な問題があるような感じがするわけです。

宮崎● いまの問題に関して、物事を根源的に考えるということを常に主張され、文明史的な立場から研究を進めておられる沖浦さん、このなかでは第一次「現代の理論」からの唯一の生き残りで、私たちより二まわりも年長なんです。この雑誌が創刊された頃の、当時の問題意識はどんなものだったのか、そのあたりをまず伺いましょう。

第一次「現代の理論」とマルクス主義の革新

沖浦● 第一次「現代の理論」が出たのが、米ソ冷戦を軸に世界が動いていた一九五九年。私たちは当時の左翼の中でもかなり異質な「構造改革派」として出発した。もちろん旧来のマルクス主義を革新しようという意欲に燃えていたが、同時に近代文明全体を問い直さねばならないと考えていた。そのためには、帝国主義打倒だけでなく、社会主義ブロックに内在した多くの負の部分にメスを入れねばならないと思っていました。これは戦前左翼が持ってなかった視角なんです。そのあたりの事情は、皆さんの体験の中にはない。

私は一八歳で敗戦に遭遇して、その

ときに戦前の非転向派が出獄したという光景を目の当たりにしてます。日本型ファシズムの中で育った世代としては、そういう反戦・反帝国主義の運動があったということが驚きだった。

それで、戦後、初めてマルクス思想というものに接した。警察に押収されていた発禁本が夜店の古本屋に出始めました。それで分からんなりにいろいろ考えた。こういうすごいことをあの戦争中にいっていた人たちがいたのか。私たちはそういう運動があったことも知らなかったし、学校教育でも全く教えられなかった。

沖浦和光

ぼくは一〇月一五日の大阪で、彼ら解放戦士歓迎大会に参加している。大阪で二〇〇〇人くらい集まってました。その半分が戦前の活動家で、半分が在日の人です。そういう人たちの存在に驚愕した。このオドロキの感覚は、今の二〇歳代が、七〇年ころに全共闘運動というのがあったことを知って「へえ、そんなのあったの」という驚きとはまた次元が違う。

そういうわけで運動に入った。途中経過は略しますが、一九四七年からの大学闘争で実際に非転向左翼に接したら、われわれのイメージは幻影であることが分かってきた。ここでは結論だけいいますが、感覚は古いし、思想もひからびていた。とにかく戦前左翼の説いていた「パルタイ」神話が急速に崩壊しだした。

もう一つは、当時のソ連の状況。世界のプロレタリア解放運動の総本山であるとするソ連神話があった。しかし、実態が伝わってくるにつれて、理念とリアルな情報が食い違ってきている。戦前派のグループはこれを糊塗して、ソ連神話でそのまま突っ走ろうとしたけど、われわれはどうもおかしいんじゃないかと。われわれ戦後世代は生の感性でものをいえる世代だったというのが大きく違ったんじゃないかな。

そういうなかで、スターリン批判が五六年二月に出てきたときは、非常に衝撃的でしたね。それにすばやく反応したのが丸山真男、日高六郎などのリベラル派。硬直した戦前左翼は反応のしようがない。「現代の理論」グループはそれに反応できた少数派でしたよ。そこにハンガリー事件が起き、五九年一月のキューバ革命。カストロ、ゲバラ、思い出してもワクワクする。サルトルのハンガリー動乱に対する声明がすごかった。サルトルやメルロ・ポンティなどもよく読んだ。われわれは、硬直した既成左翼だけではダメと思ってましたから。

その頃から、プロレタリア独裁を唱えたソ連路線とは違って、先進国における新しい革命路線を唱えていたグラムシに注目した。市民社会がそれなりに成熟している資本制先進国では「知的・道徳的ヘゲモニー」を掌握すれば、議会を通じての構造改革を成し得るという新理論ですね。

西洋列強が一六世紀に、アジア、アフリカ、南アメリカへ進出する大航海時代は植民地時代の開始だから、これを〈近代〉の起点としておさえる。ヨーロッパ的西洋は、人口で一五%しかいない。それが世界中を独り占めするという形になってきて、アジア、アフリカ、南アメリカは植民地にされ、周辺部分となった。

これにソ連がかんできた。ソ連は中心ではなく周辺部分の代表として新しい時代に突っ込もうとした。だけどその結果は見てのとおり。ロシアに生まれた社会主義が、資本制近代を乗り越えて〈超近代〉の文明モデルになるのではないかと期待した向きも少なくなかったが、惨憺たる結果に終わった。

音楽・絵画・文学などのアバンギャルド運動も、すべて若芽のうちに党官僚によって抑圧された。トロツキー派などの異端グループもすべて非殺されたが、その中にかなりのユダヤ人が含まれていたことも忘れてはならない。

理論の解体ではなく、近代文明体系全体の解体

沖浦● 私は『現代の理論』つくったときから主張しているんだけど、「近代的文明モデル」というものは終焉し、二一世紀の人類全体が目指すべき価値モデルではもはやありえないと考えている。マルクスの体系も、近代的世界の所産だった。近代とは一六世紀のはじめから第二次世界大戦まで、いや今も続いているのであって、非常にメジャーを大きくとって考えなくちゃいけないと思っています。

その中でマルクスの体系は、いろんな枝葉を総合したものだ。マルクスが初発に持っていた問題関心は、いまもって評価されるべきものを内包している。その意味では、マルクスの思想体系とソ連型社会主義を同一レベルで論じてはいけない。

マルクス自身が「近代的知の体系」の総括者の一人といえる。たとえば晩年の分析を見ても、実際は自分は行ったこともないのに、インド・アフリカ論、東南アジア論も展開している。主にイギリス議会のレポートを読んでやってる。もちろんいずれも未完で、今では役立ちませんが、その晩年は西洋中心の歴史モデル構想を抜け出そうとした努力がうかがえる。マルクスは、J・ロックなどのイギリスの市民社会論、A・スミスの経済学、ルソーなんかのフランス流ヒューマニスムス、カントからヘーゲルへの流れ、これらを総合して、近代的知の体系として構築する大ドラマを始めたわけで、「大きな物語」を構想する創造性というか、オリジナリティーはすごい。

宮崎● そのあたりの歴史の話は、予定されている「なぜいま『現代の理論』か」というところにまわしていただいて、沖浦さんが、最近の研究のなかで感ぜられた根源的な問題を提起すべきだというのはどういうことか、簡潔にお願いします。

沖浦● 近代はまだ終わりきってない。

続いてる。近代的知は全面的に解体した、マルクスもその一つだとよくいわれます。私の見解では、近代が産み出した思想や理論が崩壊しただけでなく、現実そのものが、いわゆる近代的文明体系全体が崩壊した。いや、崩壊しつつあるといった方が正確でしょう。それで、自然と人間、ヒトとヒトとの結びつきがガタガタになってきた。このことは今の若い人たちが自分の存在根拠（アイデンティティー）を見失い、何を目指して生きていくのかという価値観の喪失となって現れています。

ともかく目標となる文明モデルが見えなくなった。基底となる「大きな物語」を紡ぎだせなくなった。グローバリゼーションの掛け声で糊塗しようとしているが、あちこちにできた裂け目はどうしようもない。にっちもさっちもいかなくなった。それを科学技術主義、生産力主義で切り抜けようとした。アメリカもソ連も。どちらも軍事力をバックにして。冷戦の時代は一応は終わったが、その先が読めない。

いまのアフガン、イラクを含めて、イスラム勢などの周辺部分は世界史からずり落とされてきた。その怨念がいま爆発してきた。そういう非常にドラスティックな展開に差し掛かってきたんじゃないか。

アメリカ、EU、日本という三極構造の中に、中国が割って入ってくるのは、いろんな統計数値からみても時間の問題でしょう。続いてインドですね。私は八〇年代からインドを一〇回ほど訪れているが、その潜勢力はすごい。それにロシアが、本当の意味で革新をなしとげて再生できるかどうか。アメリカも悪王ブッシュに代わってリベラル派が出てくることは間違いなく、世界の三分の一を占めるイスラム世界も大きく再編されてくると思われる。あと一〇年でこういう多極化された時代になると思うが、それでもまだ近代の枠の中の出来事ですね。

だから、「近代の知の体系」が解体したというのではなくて、文明体系全体が解体して、それを支えていた思想も理論も、対抗していた議論も全部崩れていって、総括のしようがない。トータルに把握する視座がまだできていない。こういうように問尺を大きくとって考えた方がいい。

反戦・全共闘後の総括と構造改革派の総括が必要

宮崎● 次に少し現代の話に戻して、政治の状況と理論との関わりということで、小寺山さんの発言を。

小寺山● 僕の場合、六〇年安保が最初の意識的な、政治的社会運動だった。それが、六八、六九年の世界的な反乱、フランスの五月、その前のプラハの春、日本では全共闘・反戦青年委員会運動の中で試された。そういうふうに六〇年代後半の運動を捉えていて、いつもそこから出発するんですね。

あの運動は、すべてに異を唱えた運動だった。フランスの五月のスローガン「異議申し立て（コンスタシオン）」に象徴されているように。「すべて」というのは、当然、資本主義的な階級秩序、文化的な価値観に対すると同時にソ連型に代表される既存社会主義に対する異議申し立てだった。マルクス主義に対しても異議申し立てをした。特にヨーロッパとチェコなんかの運動では際だっていた。

それとは別の形で、時期的には六六年から始まっている中国の文化大革命がある。実際の運動は別にして、われわれは、そういう世界的な異議申し立ての中の大きな運動として見ていた。そういうシンパシーがあったと思うんです。人によっては日本の全共闘・反戦青年委員会運動はああいうものとは別の、たとえば内ゲバに代表されるようなしょうもない運動だったという総括がある。しかし、あそこで提起された、たとえば講座制解体とか医局制解体とか、教育における教える者と教えられる者との権威主義的、固定的、機械的な二分化、一言でいったら差別的な構造、官僚制を生み出すような構造に対する異議申し立てだったというのは間違いないと思います。

小寺山亨氏

それから反戦青年委員会運動は、総評労働運動、あるいは総評型政治運動に対抗すると同時に、戦後の被害者としての平和運動に対して、七・七革青闘の告発から、加害者としての立場を意識的に問題にしだした。要するにお前らの運動は結局、植民地に対する贖罪があったのか、アジアに対してどうだったかを突きつけられた。そういうことに、強く衝撃を受ける素地があった。その意味では、日本の全共闘運動、反戦青年委員会運動も、世界的な青年・学生による異議申し立て、反乱の一環としてあったと思う。

それ以降、確かに欧米の運動も後退した。しかし、後退の度合いと質が日本とは大きく違った。たとえば、フランスとかドイツなんかで――これは住沢先生の専門ですけど――出てきた緑の党の運動は、どうして日本では成功しなかったのか？　少なくとも現在まで微々たる存在でしかない。ところが、七〇年代初頭には、すでに宇井純さんだけでなく、反公害運動が、かなり大きなものとしてあった。にもかかわらず、緑に集約されていくような理論や運動スタイルはどうして遅れたのか。やはり六〇年代後半、自らの運動の総括の仕方に大きな問題があったのではないか。非常に歪んだ、マイナスのあらわれが軍事――といったってマンガみたいなもんでしたが――ということに集約されるような方向と、あと、内ゲバに結局なっていった。

新しい『現代の理論』をやる場合、その総括は避けて通れないと思う。

構造改革派としても同じ。たとえばあの六〇年代後半の労働者の運動だったら、チェコも含めて、フランス、イタリア、後のポーランドも、共通のスローガンは労働者の自主管理だったん

ですよ。「職場に権力を」と。構造改革派はグラムシをやってはいたが、それにつなげなかった。グラムシの工場評議会運動の総括に始まって、僕は、個人的には一生懸命やってたわけですが、どうしてその後、実際の労働運動などに活かされなかったのかということ、自己批判的な総括が必要ですね。

ま、どっちかというと、日本のグラムシ派、創造的マルクス主義派というのは、グラムシ―トリアッティとセットにして捉えてたんじゃないか。やっぱり、今頃になっていろいろいわれだしたけど、グラムシの独自な部分、それをあの時代に見落としていたのではないかという思いがありますね。

理論的には六〇年代後半、政治的には九一年

小倉山● もう一つは、政治的には九一年というのが、非常に大きいと思うんです。八九年を含めて。つまり、湾岸戦争、ソ連邦の解体、東ドイツの崩壊と統一。少し個別の問題でいえば、SPDの登場とその意味みたいなもんですね。――ラ・フォンテーヌ的なSPDがどうして登場したかという問題があるんです――。アメリカが帝国として登場し、日本がそれに追随する国際貢献、そのための憲法体制、日米安保体制の見直し、そして政治制度の改革、そういうのがだいたいあのあたりで全部出た。そして、ポスト冷戦ということで、いままで流れてきている。

だから、政治的には九一年。理論的な意味においては六〇年代後半。そう考えています。

宮崎● いまおっしゃられたように、六八年の異議申し立ての運動がその後、消費社会化の中で絡め取られて、さらにグローバリゼーションと市場主義のなかで困難な状況に陥っているというのが大雑把な流れだと思います。そういう流れの中で少し政治主体の側面に重点を置きながら住沢さんから、コメントをもらえればいいんですが。

住沢● 私も全共闘世代ですので、出発点は六八年だと思います。そういう意味では、いまいわれた六八年の異議申し立て運動という把握はだいたいみんな同じだと思います。私はこの座談会では少し下の世代ですので、それから振り返ってみまして、私自身の政治体験、もしくは思想・理論との関係でいいますと、三つくらいの段階にわけられると思います。

一つは六八年から七〇年の間の運動の高揚期の原体験があります。しかし七〇年以降、日本でいえば連合赤軍事件がありました。全体として日本の左翼はそのあと内ゲバに象徴され、全共闘運動が崩壊していく。その中で、非常に時代閉塞の感じがあって、私は七三年にドイツに行ったわけです。同世代の人と話しても、やっぱり七二～三年から、時代閉塞を感じたという人が多い。

その上で、日本に残って頑張った人には申し訳ないんですが、かなりの人々が「新しい世界を求めて」その頃海外に行ったと思います。

ドイツ緑の党の結成を見る

住沢● 二つ目。ドイツに行ったのは石油ショックの七三年。ブラント政権からシュミット政権へという、社民党の時代で、ここで初めて「社会民主主義」や「改革政治」の洗礼を受けました。

しかし学生はさらに左傾化しており、当時、ドイツには二人の有名な六八年世代の人がおりました。一人はドゥチュケという六八年運動の指導者。もう一人は、フランスの五月のダニエル・コンバーンディ。私は、このコンバーンディのグループが活動拠点とするフランクフルト大学に、籍を置きました。といっても、外国人学生として特に運動とかかわったわけではありませんが、当時は、六八年チェコ・プラハの春の亡命者や、チリ・アジェンデ政権の亡命者など、大学は亡命者で溢れていました。コンバーンディらは自然発生主義者運動というのをやっていた。Kのつく（共産党―レーニン主義・毛沢東主義の受容）党派運動をいっさいやめようと、対抗文化運動や、住宅占拠運動や街頭での実力闘争をやっていました。現在の外相のフィッシャーもその一人です。彼らはドイツ赤軍のテロを批判していましたが、西ドイツ・反共抑圧国家批判という点では、境界線は曖昧でした。

このグループも、多くのKグループも、七七年の赤軍のテロと敗北を見て、突然、エコロジー運動に行こうと、方向転換をいうんですね。誰がいったということではなくて、全体にそういう流れができた。エコロジーに限らず、平和運動や女性運動、対抗文化運動など、要するに新しい社会運動ということで、あっという間に七七年から八〇年の三年間に、緑の党的なものが一斉に結集される。見事なまでに短期間に転換に成功してしまった。その背景には、八〇年代西ドイツ社会が、ナチの継承国家ではなく、改革可能な体制として認識されたことが挙げられます。

そのとき驚いたのは、ドイツ人の持っている組織に対する実践的な考え方です。ドイツも日本と同じように、六八年の異議申し立て運動が、その後、マルクス主義を再受容して、どんどん小さな共産党がつくられました。そのなかの西ドイツ共産党といいましたか、緑の党の一つのグループになりますが、彼らは党の資産をため込んでいました。ビルも持っている。その彼らが解散集会を開いて、こういったものを全部緑の党に移譲していったのです。あれは非常に驚きました。たとえば、金持ちの息子に遺産が入ると、階級闘争のために党に寄付する。そういった不動産含めて全部、党資産が運動体としての緑の党に継承されました。あのような団体に対する、組織に対する在り方というのは非常に感心しました。ドイツ人特有の組織作りのうまさというか、アソシエーションがごく自然にできた。

あと一九八四年の金属労組による時

短闘争、八〇年代の社民党の綱領改革論争など、大きな影響を受けたできごとをこの目で見ることができました。

そして、第三の体験は博士論文を書き上げ、八八年に日本に帰ってから。そのとき、社会党が土井ブームで最盛期だった。私はドイツの体験で、社会民主党の転換、新しい社会民主主義というものを肌身で体験して帰ってきたとき、ちょうど日本でそういうことが起きていました。最初に声をかけてくれたのが『現代の理論』の安東仁兵衛さんと、社会党の『新宣言』の起草に関与した高木郁朗さんでした。それで、社会党の党改革に加わり、さまざまな形でやりました。九四年、村山政権成立後は、安東さんとは意見は対立し、元委員長の山花貞夫さんたちと新しい民主党の設立も一緒にやってきました。民主党は現在、全てのグループを結集した議員政党になり、出発時とは異なっています。こことどうかかわるかという問題が私にはあります。

ということで、大きく三段階の私自身の政治体験があります。その意味で、さっき沖浦先生のいわれた近代社会という部分では二〇世紀の後半部分、六〇年以降の運動を、自分でカバーしていると思っています。

ヨーロッパ革新思想の衰退と アメリカ市場主義の台頭

佐沢●では思想という点でいえば、なにがいったい問題なのか。六八年はやはり、圧倒的にマルクス主義、西欧マルクス主義の影響下にあり、ヨーロッパ左翼の文化なんです。本家のヨーロッパでは、逆に毛沢東主義が流行でしたが。

いまから考えますと、戦後日本の左翼というのは基本的にワイマールの思想状況に源流があると思います。例えば戦後マルクス主義や進歩派を代表する人々、彼らは若い頃ワイマール時代のドイツへ留学していたんです。福本イズムの福本から三木清まで、二〇年代ドイツの新しい、現代的なものを吸収している。経済学でも宇野弘蔵、それから社会リベラルともいえる有沢広巳。戦中世代の丸山真男の場合は、ファシズム批判、アレント、ノイマンなど、ワイマールの大衆社会状況を継承しています。フランスの人民戦線とイタリアのグラムシ主義も含めて、そういう意味では日本の左翼はヨーロッパ的な左翼を継承してきた。安東さん自身、完全にこの伝統のなかにいた。小寺山さんがいわれた緑の党の話も、ヨーロッパを母体にした新しい形の思想を継承していると思います。

しかし、いま思想の危機といわれるとき、なんといっても基本はアメリカの問題ですね。そういうヨーロッパの左翼の伝統を受け継いできた戦後日本の流れ、世界的に見てもある意味、革新派の流れというものが、冷戦の終結、ポスト社会主義とグローバル化の九〇年代に、汲み尽くされつつあります。ハーバーマス流の公共性の理論とか、コミュニケーション理論、新しい市民社会論とかがありますが、アメリカのリベラリズムの概念に半分置き換えられて議論されています。ですから、すべてとはいいませんが、やはり二〇世紀のヨーロッパ左翼の流れというのは、特に理論、運動面では、批判的な力を失いつつある気がします。それ以上に、新しい動きに関する情報量も少ない。

逆に日本に入ってくるのは、一つはアメリカの市場主義イデオロギー、市場社会論ですよね。それにアメリカのグローバル戦略論。そういったものが、圧倒的に日本に入ってきます。これはネオコンだけでなく、NPOやニュー・エコノミーなど、改革理論としても受容される。流入回路がヨーロッパからアメリカに切り替えられ、またヨーロッパ自体もアメリカからの過剰な流入に脅かされるなかで、左翼理論のスタンスが分からなくなってきています。

寺島実郎氏が最近ユーラシア論を出してきています。アメリカのグローバル戦略に対して、中国を含めてユーラシアをもう一度再評価しようと。姜尚中氏がやはりユーラシア論を出して、西のEUと東の東アジアで一緒にやっていこうと。そんな地政学的な話も出てきて、危ない気もします。とにかく、ヨーロッパ的な文脈での従来の経済学批判、イデオロギー批判を中心とする左翼理論を位置づけることは、非常に難しくなっていると思います。

「思想の平和的共存」

宮崎●では、皆さんにひととおり「現在の時代状況をどうとらえるか」という点についてお話しいただいたので「なぜ『現代の理論』か」という方に移って、かつての『現代の理論』との脈絡のうえでの話に移りましょう。

沖浦●「近代」も「現代」もモダンなんですよ。それで第一次発刊の際にわれわれが話したのは、あくまでも「近代」を乗り越える新しい理論的地平を開拓するという意味で、『現代の理論』になったんだね。このネーミングを仁兵衛は、エライ自慢しとったんだけど（笑）。近代じゃねぇぞ、現代だと。その大過渡期であると。それから四〇年も経ったが、さっきいったような米ソ冷戦の終結後も南北めがかからない状況が続いた。二一世紀を見通せる文明モデルというか、新しい世界構造を構築できる思想体系がまだ出てこないというのが実状でしょう。

僕は六〇年に書いたけど、一九二〇年代の福本イズムと山川イズムの対立だね。全共闘いうのは福本型なんです。これまでの社会思想史では、山川の柔らかさというのは全部日和見主義という形で流されてしまっている。

さっきおっしゃった全共闘の総括はもちろん重要ですね。しかしこの問題は、福本主義の発生過程から分析しないと、こういう運動タイプがなぜ若い人たちを吸引したのか見えてこないのではないか。硬直した思想性で筋ばっかり追っかけて、時代の大状況に適応していく柔らかさがないという点が一つ。運動全体の推移を冷静に考察し

て、小異を捨てて大同に就くという決断力がなかった。盛性で考えないという面があって、だから非常に日本型の凄惨な内ゲバ的状況になってしまう。これは根が深い。全共闘を総括するとき、単に七〇年問題では片がつかない非常に大きな問題が、日本の運動史の中に伏在しているんじゃないか。

そういう点では、やっぱり丸山さん、日高さんなどの流れをもっと組み入れるということも非常に重要だった。われわれは組み入れるべきだという意見だった。五五年頃に思想の平和的共存を日高さんが主張した。異端とみなされている諸潮流もみないっぺん取り入れて考えたらどうかという提案がなされて、それに対して一番引っかかってきたのがやっぱり戦前左翼だった。すべて帝国主義の側であると、切って捨てた。その裏側には例の「パルタイ」神話があったわけ。その点では他の潮流との対話を重視したのは「現代の理論」グループだけだった。

確かに、なぜ緑の党へ行かなかったのかという問いはある。ローマクラブのあのレポートは七一年でしたか、あれに一番早く反応したのは「現代の理論」だった。特集を何度も組んだ。同人に科学技術研究者がかなりいましたからね。だから、自然と人間との根源的な関わりを基軸にして、資源問題からエネルギー論、自然論などかなり体系的にエコロジーの問題は論じてるわけですよ。それは確かに運動の中にはまらなかったというのはある。内ゲバ的硬直した路線に「現代の理論」の若い連中はイカレとったからね（笑）。

二項対立的発想・敵味方論の克服

宮崎● 日本の左翼の伝統といえば、戦前の社会民主主義の運動なんかもそこそこ頑張ったのに、戦後の歴史観から見ると戦前は真っ暗、軍部と天皇制ファッショで一五年間戦争が続いていたという雑駁なものになる。戦後に共産党が出てきて、その栄光の歴史で戦前を単純に否定する。社会民主主義的な伝統とかも活かされないで、共産党がすべてだということになった。明治にさかのぼれば、福沢諭吉のことを吉野作造は継承してないし、また吉野作造がいろいろ頑張ったことを戦後の歴史がまったく否定しているというか、見ないというか……。そういう運動の歴史や伝統というものを清算しながらきちゃうというところが日本の不幸ではないかという気がしますが。

橋川● 近代的なものの考え方というのをどういうふうに総括するか、どういうことで表現できるのかというと、これは全部いえるかどうかわかんないけど、二項対立的な発想が非常に強い。あるいは敵味方理論といってもいいんだけど。敵と味方に際限なく……。

沖浦● すぐ分けちゃうわけだ。

橋川● 現実はいろんな機能を果たしながら動いている。だから、一見敵であるやつが、ちょっと時間という幅をおいてみたら、結果としては非常に功績があったということがありえるわけで。現実の複雑さに対して、二項対立的な発想は、完全に追いつけなくなった。なにが対立しているのかわけがわかんなくなってるわけですよ。たとえばイラクの事態について、これをわかるようにするために、別の二項対立の図式――文明圏論であるとか、アメリカ大陸対ユーラシア大陸とか――を持ってこようとしても、衣装を替えているだけなのが、最大の問題。

また、そういう発想は、対立する相手側にある多様性や可能性を見ようとしないばかりか、自分自身の側にあるそれにも気づかない。多様なものの共存ではなく、ひとつの原理・「正義」の押し付けしかできない。その欠陥は、残念ながら日本の左翼にもあった。日本国内の被抑圧者の問題、たとえば在日朝鮮人や被差別部落、沖縄やアイヌなどの問題に鈍感だったことは否定できないでしょう。いま、世界はますます多様で複雑な様相を呈するようになってきています。また、人間自身も、理念的に捉えられた「近代人」よりもはるかに多様で複雑であると考えられるようになってきているでしょう。それを敏感に受けとめる感性を養わなければならないと同時に、感覚だけではなく、それを組み込んだ理論をどう構築していくかが問われているのではないか、と思います。

橋川俊忠

沖浦● 僕は戦後の価値観でもね、まずデモクラシーがでてきて、それからヒューマニズム、モダニズムもでてきた。これらのコトバは戦前では流通していなかった。だからすごく新鮮に感じたんだけど、よく考えてみると、手垢にまみれたイデオロギーなんだな。さっきいった世界史の周辺部分というのはね、西洋人が唱えたヒューマニズムの中には入ってない。いわゆる植民地の人間は埒外なんですよ。クリスチャンだけが救済の対象となる。アニミズムを奉じている先住民族や異教徒であるイスラム教徒は、ヒューマニズムの枠の中に入っていない。

デモクラシーもそうでしょ。西洋世界でだけ流通した概念で、支配下におかれた周辺部分はまったく関係ないわけ。そういう手垢に汚れた概念を戦後われわれは新しいものと見た。そういうところから問い直す必要がある。いまはグローバリゼーションでしょう。あのブッシュでも、口先ではヒューマニズムや人権とかいっている。

民主主義の問題

橋川● いや、それは政治学者としては少し反論したくなるところです。つまり、デモクラシーは確かに手垢にまみれた言葉ですよ。たとえばアメリカがイラクに押しつけようとしているデモクラシーというのは、ある国家の法体系としてできあがったもの、あるいはヨーロッパなりアメリカでできあがったモデルを押しつけようとしている。だけど、デモクラシーというのはそう

いう格好では絶対根付かないわけですよ。住沢さんがいったように、たとえば組織をどうやってつくるかということでいえば、組織の形をつくって動くわけではない。それを行う人間の関係のつくり方のノウハウを含めて、根付くかどうかがポイントです。イスラムの中で地域を再建する動きは起こっていて、違ったタイプのデモクラシー、組織をつくりだす力に目をつけたら、新しいものができてくると思う。

沖浦● いや、そういうことではなくて、デモクラシーという西欧産の言葉の歴史性と流通性を考えないで、そのまま使っていたことを自己批判しとるんですよ。

鳴川● それはわかるんですが、そのまま使っているわけではないですよ。「翻訳」しているわけですが、その「翻訳」が、概念の基礎にある重要な実態についての理解を欠いたまま使われる。そのことを深く理解しないと、また、同じ過ちをくり返しかねない。人権や民主主義という概念がどんなに手垢にまみれていようとも、それらの概念を実現しようとする努力によって、多様な世界が開かれてきたのは、事実でしょう。その意味では、簡単に、それらの概念を捨てればいいとはいえないと思います。

宮崎● かつて「自己否定」といっていたのは、個人と社会の関係を問い直すということでもあった。植民地・被抑圧民族ということも議論になっていた。そういう契機があって……。

沖浦● 五月革命も、アメリカでは黒人問題、先住民族問題として波及した。日本でも部落問題、アイヌ問題が発火する大きい契機になった。

小寺山● 戦後民主主義は「部落」を残したままの民主主義だった。朝鮮・アジアも同じように欠落していた。アメリカでは、公民権運動に対してブラックパンサーは、黒人の自立と解放を求めた。テロも戦争も反対というが、思想のレベルでは、対立を否定するのはおかしいと思う。なぜテロが起こるか、そこへ追いやっているのは誰か、それを問いかける必要がある。それを表現できるスローガンがあればよい。イタリアで二〇〇万人のデモがあったが、「テロも戦争も反対」ではない。「北」の文明・文化に対する自己批判が根底にあるのではないか。民主主義というのは、そこまで突っ込んで考えるべきだと思う。たとえば、部落はどうやとか、アジアがどうとか。沖浦さんは「根源的」というけど、そういう意味で提起しているんちゃうかな。だから、手垢にまみれたというよりも、ちょっと違うんやないかと。

沖浦● カッコ付きのヒューマニズムであり、デモクラシーであったといってるわけよ。さっきイスラム出てきたけども、われわれ、五〇年、六〇年代までイスラム世界なんてあんま頭入ってないのよ、正直いって。これは日本の思想界全体でもそうでしょう。

旧約聖書の世界はユダヤ教でしょ。そのユダヤ教から新約聖書のキリスト教が出てきた。そこから六世紀にマホメットのイスラム教が出た。これ一本の系統樹ですよ。みな一神教で。この系譜をどう見るのか。これと植民地拡大の一六、一七世紀の動きとどのように照合していたのか。このように視野を広げて、われわれは総括をしてない。日本の学問では、実際上できなかった。そういう大きな限界がある。

だから、僕はさっき古い図式で、〈中心と周辺〉といういい方をしたけれど、ブッシュ的帝国主義で、武力でズカズカと台所や寝室まで踏み込まれると、今までの文明体系から疎外されていた人たちの怨念が爆発する。僕はテロもありうると思う。テロという概念も、もっと哲学的に考えてみる必要がある。

宮崎 隆

メルロ・ポンティに「テロリズム」という論文があるんだけど、世界史の大転換点ではテロが出てくる。自分たちの民族的なアイデンティティーがズタズタにされ、唯一の拠り所だった宗教的価値観まで嘲笑され、人間としての存在根拠まで否定されると、やっぱり誰でもやりますよ。そこまで踏み込んで考えないと、いまのイラク問題の糸口なんてなかなか見いだせないんじゃないかな。

宮崎● さっき小寺山さんがいわれた日本とヨーロッパの思想の違いという点で、住沢さん、コメントを。

住沢● 一つは、日本社会をどう規定するかということ。

この三月に小沢一郎さんを講師に呼んで、話を聞いた。小沢さんを呼んだのは、彼はかなり一貫したことをいっているというのが一つの理由。何がしたかったのかと聞いたら、小沢一郎流原理主義では、要するに日本人はすべてを曖昧にして、ぬるま湯につかっていたいと思っていると。しかし、世の中それはできなくなっている。それが八九年から九〇年頃には分かっているのに、依然として日本人の大部分はぬるま湯につかっていたいと思っている。いろいろな問題が出てきても、根っこの答えを出さない。だから自分の役目はそういう曖昧な日本人をやめてはっきりとした答えを出しましょう、ということをずっとやってきたんだと、彼はいうんですね。これは慎太郎流の「NOといえる日本人」とは異なります。

確かに外部から日本人を見ますと、一方ではある種の曖昧な共同体なんですよね。しかし、他方でそれが突然、決着しようとなると、内ゲバなんです。そのどちらかなんです。曖昧な共同体か、内ゲバに行ってしまうか。

八〇年代後半以降、一番激しく内ゲバやってきたのは田中派なんですよ。それが、最後は全部潰れてしまって、結局、勝ったのは小泉の福田派という話になっている。

日本の新左翼でも全共闘でも、全部やはり曖昧か、徹底した内ゲバになってしまった。結局は閉ざされた共同体

で、それを越えるようなユニバーサリズムが出てこない。聞かれていないということが常に問題になってくる。

戦後革新勢力

住沢● 戦後民主主義よりむしろ議論してもらいたいのは戦後革新勢力。戦後民主主義についていえば、一九〇〇年ですか、社会民主党宣言ってありましたよね、堺利彦とか荒畑寒村、幸徳秋水等々で。彼らは具体的要求も考えるわけです。ロシア革命前ですけど、軍の廃絶とか、土地所有の改革とか、身分制、特に貴族制の廃止とかね。それらのほとんどは一九四五年に実現しているわけです。一九四五年に軍が解体して、農地改革が行われて、民主制が導入されて、貴族制が解体された時点でほとんど実現している。産業の公有化などは別にして。要するに戦後の出発点で、一九〇〇年では革命的だった要求が、すでに実現した。そのなかで大内兵衛や有沢広巳のような社会リベラルというのが戦争前から東大の経済学部を中心にあり、戦後の日本の官僚や労働運動に影響を与えてきた。こうした戦後的合意を軸に、思想としての戦後民主主義があり、やや左に、運動体としての戦後革新勢力がありました。

住沢博紀

私は戦後民主主義よりも、むしろ総評を中心とした戦後革新勢力論に興味を持っています。というのも、戦後民主主義は、戦前のファシズムや天皇制に対峙していますが、戦後革新勢力は、戦後の冷戦構造の産物だからです。清水慎三さんの論考にまとめられていますが、戦後革新勢力論に立つならば、その遺産はすごく大きいし、限界も明らかになります。要するに、それは一九五五年体制（レジーム）と対決し、かつ支えてきました。今もこの一九五五年レジームとの決別が課題になっているのです。

例えば、民間臨調などと共に、連合会長の山岸章が反自民でがんばるわけです。九三年細川政権ができるときに、彼が依拠しているのは戦後革新論だと思うんですよ。そうでなかったら、単純にもっと組合の利益政治をやってもいいわけです。ところが、やっぱりそのなかで最低限の彼らの共通了解事項がある。それが何かといえば、「革新派」を担うという自意識だった。だから、連合自身の役割とはだいぶ違うにしても、かなり日本のなかでは、左翼の立場をとっていた。

私が八八年に帰ってきたときに、日本の左翼の人々の多くが、日本には社民勢力が弱く、左派というか前衛派は、大衆的な社民運動のないなかでやっているんだという。だから困る、孤立するんだという話をよく聞きました。しかし冷戦世界に対応する立派な戦後革新勢力はあった。問題は、それが一九五五年レジームの変化について

いけなかったわけです。

たぶん『現代の理論』の「現代」というときに、その意味は、戦後革新勢力が持っていたような社共的な、労働組合的なものを越えたような、世界的な、あるいは市民的な新しい力をつくっていこうということだったように思います。それを八〇年代の後半に少しは実現できたかもしれない。しかし、実際、社会的な勢力として戦後革新勢力を継承できなかった。二〇〇五年に向けた、「現代の」理論と新しい勢力論が必要とされている。そのためには、現在でも、一九五五年レジームの徹底した解明が必要です。

階級論の再構築

井澤● グローバリゼーションで、世界各国で貧富の格差が急速に広がりつつある。ぼくは二一世紀に入って、もう一度考え直さなければならないのは「階級」論だと思う。今では「階級対立」という言葉は死語のようになっているけど、実態はそうではない。僕らが知ってる戦前のいわゆるインテリと大衆の関係。インテリゲンチャ論いうのは『現代の理論』でも何回か特集した。戦前では大学卒のインテリは一パーセントくらいしかいなかった。これが全部文字文化を独占し、次いでせいぜい十数パーセントの小市民階級がいて、それ以外はプロレタリアだったんですよ。

戦前の日本におけるインテリと大衆との乖離、これはすごかった。僕らは肌身で分かる。学卒のインテリはプロレタリアートとはつき合わないし、住んでる地区も違った。読むものも違う。こういう大きな乖離があって、これをどう理めるのかということが大きな問題だった。そういう切り口が、現代でそのまま通じるわけではないが、偏差値による輪切りで、学歴階層社会が新しく再生産されつつある。キャリアのレールにのれなかった大量の「落ちこぼれ」は何を目指して生きていけばよいのか。今は若い人たちの半分は大学まで行く時代だが、重厚な本は読まない。昔流にいえば、彼らはインテリではなくて大衆ですよ。

いまは政界から本当のインテリは逃げちゃったわけよ。戦前は、少数のインテリでもごっついのが出てきて、生死を賭けて政治の最前線でいろいろやったけど、それがいまでは、いわゆる「政治家」の世界は胡散臭いというわけで、皆逃げてしもうた。

いまはプロレタリアートの問題というのは誰もいわないが、戦前の運動史をみても、非常に優秀な人物がいっぱいおったんだ。階級は消えたとよくいわれるが、そういう角度からも見直してみる必要があるんじゃないか。

橋川● 何を遺産として考えるかということで、いろいろなことが出てきたけど、そのなかで、さっき、思想の平和的共存ということが出てきた。『現代の理論』がどんな理論的な立場を共有しているのかは別に、執筆者を見てみると、確かに非常に幅が広く、いわゆるリベラリスト…と括っちゃうのも問

題あると思うけど……。

沖浦●安仁も労働運動の最前線の人たちとよく接して、その声を誌上に載せようと努力していた。リベラル派では宮沢喜一も出てきたことがある。

橋川●それからマルクス主義者まで幅広くあって。もう一つは、『現代の理論』を一種の登龍門としていろんなところに出ていった人がたくさんいた。

沖浦●そう、この雑誌から論壇や学界に出た若い人たちも少なくなかった。

異なる思想との対話

橋川●そういう意味でいえば、「現代の理論」は確かに小さな雑誌ではあったが、いま出すときにも、そういう立場を越えた、それを平和的共存という表現はあの時代に特有なものだったから、そうじゃなくて、別の、それこそまさに新しいネーミングでいきたい。

小野山●異なる思想との対話……。

橋川●そこですよ。要するに対話をする、ぶつけあわせると……。丸山真男の「日本の思想」を引っぱり出すまでもなく、やっぱりヨーロッパの最先端を気の効いた者がぱっと紹介して、ヨーロッパで別の流行がはじまるとまた移っていって、新しいものを伝えるだけで、新しい思想を生み出していく力としては蓄積されないという構造が依然として日本の場合にはある。いまは世界がわっと開かれちゃって、その状況の中で情報の洪水が入ってくる。そうするとますます小さな流行を追っかけるような言説しか流行らなくなってしまう。

そういうと宿命論になるけど、そこをどう越えるかというのは、自覚化しないといけない。その意味でも、やっぱり、言葉の問題というのは、僕は再定義というかあるいは言葉を掘り下げていくという作業が根っこにないと、どんな新しいことをいっても宙に浮いちゃう。この社会では。そこの点は充分注意しなきゃなと。

沖浦●新しい胎動を感じてないと、新しい発想やコトバは結び出せない。いつの世でも、その時代を越える文化は、「パロール」が先行するわけ。まず「ラング」があるわけじゃない。言語の体系でパロールいうのはしゃべり言葉。実際にこの浮世の最前線で働き生きている民衆の間で、学問と関係ないところで、パロールは始まる。

だから古代の話に戻せば、縄文的世界がパロール型。そこへ渡来系の大陸文化がラングとして入ってきて、『記』『紀』に代表される古代ヤマト王朝の文化体系が形成された。つまり縄文人のパロールは歴史の表層からは見えなくなってしまった。その系譜はこの列島にちゃんと存在しているのに。

こういうことも頭に入れとかないと、われわれすぐにインテリのラングの世界に閉じこもって、思想の目線がそこにしかいかなくなる。そうなると、これはおもしろい運動になってこないんじゃないか。インテリだけに通用する文字文化というか、これまでの「文体」そのものが、革新されねばならない。

ヨーロッパの思潮の紹介・新しい文化を取り上げる

小野山●『現代の理論』の魅力は、僕をひっくるめて実践家とすればね、「第三の道」路線だったわけですよ。ロシア革命型革命でもなく、社会民主主義の議会を通じた政権獲得でもなく、市民社会から、グラムシ流にいえば、ヘゲモニーを蓄積していって、長期にわたる文化的改革、価値観の転換を伴いながらの「革命」。それは『現代の理論』流にはたとえばユーロ・コミュニズムの紹介であり、ユーロ・ソシアリズム（フランス社会党が七一年エピネ大会で六八年五月の最良の分子を結集して、それから一〇年でミッテラン政権をつくったこと等）の発見だった。特にヨーロッパの運動の紹介をしながらやってきた。日本においてどう現実化するかに至らずに『現代の理論』は終わったと思うんですよね。

ただ、その流れでいうと、八六年に、大内力さんを中心とした社会党の社会民主主義宣言があった。僕ら七七年に社会主義理論政策センターをつくって、わりあい精力的に大内さんなども呼んだんですけども、これはほとんど注目されなかった、社会党内外で。しかし、新宣言は、後の暉峻さんの『豊かな社会』（岩波新書）の出る前ですが、経済成長主義、その分配を要求する労働運動、これでいいのかという問題提起に、非常に感銘を受けました。教条主義的新左翼は、これをコテンパンにけなした。しかし、社会党周辺の人もほとんど注目しない。これがうまくつながってればの話だけれども、僕は日本において第三の道的なのが最初に登場してたと思う。そしていま思うと最後のチャンスだった。あの数年間は。そういうものとして『現代の理論』の魅力があったわけですよ。

住沢さんが来ているからちょっとおべんちゃら的になるけど、そんななかで、ラ・フォンテーヌの本やSPDの論争の紹介がかなりやられた。安仁さんなんかはやっぱり社会民主主義やったという結論になるけど、僕はそうではなく、SPDも第三の道的なものとして受け止めていた。

では、現代において何かいうことになる。いまのところ、先ほど出てきた言葉の問題も絡めていうと、市民社会とは何かとか、市民とは何かとか。それからヘゲモニー、特に知的・道徳的ヘゲモニーとはなにかとか、そのなかでたとえばフェミニズムをどう位置づけるか、エコロジーはどうかとかね。かつては否定すべき対象もはっきりしていたし、かなり明瞭にいえたけど、いま、そういうことすらもいえなくなった時代のなかで、しかし新しい要素いうのは、また登場しているわけ。

それから、日本だけではなく、特にアメリカに対抗するヨーロッパの最先端の運動とか理論等とかを精力的に集めて紹介する。これをやるだけでもかなり意味あると思いますよ。いまのメディアの状況は、みんなアメリカからばっかり入っているわけだから。

沖浦●それは大いにいえるな。

小寺山●それにもちろん沖浦さんが好きな「周辺」のものが入ったらいうことないけどな。まあ、とにかくヨーロッパの情報いうのは、それだけでパワーになると思う。

沖浦●たとえばいまのスペインね。だから『現代の理論』では新しい思潮の紹介欄を、必ず付けていた。いろいろ掘り起こしてきて、皆が読んでない最新の雑誌の内容を紹介した。

小寺山●なんせこの国のサイクル早すぎるわ。ろくに消化もせず総括もせず、クルクルクルクル新しいもの入れてくる。「新しい」という言葉、だいたい沖浦さん前から好きなんや(笑)。あんまり新しい新しいといわんといて。

沖浦●いや、例えば映画の動きとか、音楽や演劇など芸能の世界も注目すべきだな。いまのミュージック、こういう新しい波長も取り上げないと、若い世代には全く通じない。ともかく新時代の予兆は、アンダーグラウンドの世界から始まる。だから文化を重要視せんといかん。僕が第二次『現代の理論』の創刊号に書いたのは映画評論。『僕の村は戦場だった』かな。当時、スターリン体制を批判したソ連の革新映画のさきがけ的作品だった。

小寺山●なんでも手出してるじゃない。もうじき映画評論家いうんやないか(一同爆笑)。

宮崎●今日の議論がそうであるように、正に混沌の中での再出発になりますが、カオスはエネルギーが溢れているというのも事実です。そのなかで、多少とも理論的、体系的、歴史的に考えていく場をつくりあげていくことがわれわれの課題ではないでしょうか。そして、硬直的ではない、刺激に富んだ仮説の数々をどれだけ提示できるかに『現代の理論』の成否はかかっていると思います。

◆誌上参加◆

私の宿題

池田祥子

もともと〝天の邪鬼〟なのに、熱く長かったであろう座談会が終わった後に、活字の上での「誌上参加」とは、それでなくとも勝手な、無責任な言い放しになってしまいそうです。それを恐れつつ、自戒しつつ、最後には「図々しい言いたい放題」に開き直りました。お許しください。

「現実と理論」をめぐっては、私は小学校四年の時の幼い頭で悶々とした「問い」を未だに引きずっています。

四年生の時、友人の家で初めて「朝日グラフ」だったか、原爆の写真――大量の、きのこ雲も被爆した人々の――を見ました。言葉にならない衝撃でした。これが、戦争であり、人間の現実だということがショックでした。しかも、私たちの「小倉」は八月九日原爆投下の予定地だったのに、急遽長崎に変更されたというのです(ずっと、小倉が曇っていたから、と聞かされてきましたが、現実は調査隊との合流のための急遽変更だったようです)。予定通りだったら、私は二歳までの生命でした。だから拘わりは大きいのです。

朝鮮・中国や東南アジアへの侵略の当事者・加害国の日本に「憲法九条」が制定されたけれど、なぜアメリカの原爆は破棄されないのか、謎でした。

しかも、その頃、日本の再軍備が浮上してきました。戦後間もない民主主義教育のお蔭で、学校でも新聞を持ち寄って、クラスで大論争をしました。「洞」のような憲法9条だけれど、せめてそこを足場に、アメリカの原爆も破棄させていくことこそ日本の役割だと思うのに、なぜまた再軍備? しかもそれはアメリカの要請? またまた謎でした。

ところが、初めは再軍備反対―が多かった生徒たちが、教師の「口締まりは大切」の一言で、大半が「仕方ない」に変わっていきました。最後まで「軍備はいらない」を言い張っていた私に、ある男子が「人間はいい人ばっかじゃないんだよ。悪い人もいるのに…」といったのです。違う、普通の人がいい人になったり悪い人になる。戦争をするのは普通の人、大勢殺すのも普通の人、それが人間。でも、それを繰り返して来た今、それをしないように努力するのも人間だと思う。本当に何が必要なのか、一緒に考えようよ、とその時いえると良かったけれど、私は頭も胸も一杯で黙ったままでした。想いや感情は溢れるほどだったのに「言葉」にならないのです。無力だったし無念でした。

その後、私も人並み(?)にマルクス主義を正しいと思い、資本主義はおかしいと思ったけれど、今にして思えば、日ソ不可侵条約を一方的に破って攻めてきたソ連、朝鮮戦争を仕掛けたソ連。東ドイツ・ハンガリー・ポーランド・チェコの民衆をおし潰すソ連の戦車、そして、核実験を始めたソ連の現実を見ながら、胸のどこかで払拭しえない違和感や疑問を抱え込んでいたのでしょう。そして「いい社会主義」「本当の社会主義」を求めている内に、その発想や姿勢につきまとう観念性やイデオロギーが鼻につき始めてきました。フランス革命二〇〇年の一九八九年頃のことでした。

理想的な人間や理想的な社会が忽然と登場してくるわけではない。目の前にある矛盾の多い人間と社会の現実をしっかりと見据えながら、それを少しでも変えていけるための理論を、それぞれの人の体験から紡ぎ出し、交差させ、より深めていくことができればと、いま漸く、私自身の宿題にも改めて向き合えたような気がしています。

池田祥子